

東日本大震災後の釜石市における ダークツーリズムが与える消費者意識の変化

三陸復興・地域創生推進機構 三陸復興部門 農林畜産業復興総合計画班 佐藤 和憲 (農学部教授)

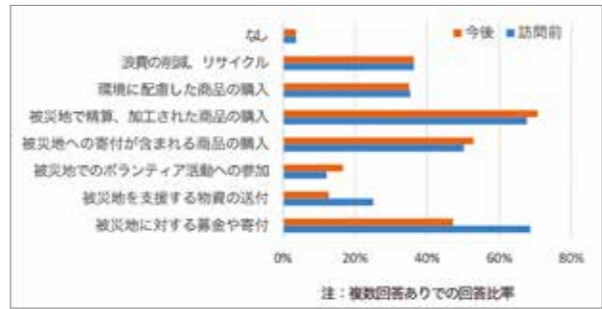
東日本大震災を契機として社会貢献活動の重要性が再認識されたが、なかでも日常的倫理的消費を通じた持続的、長期的な被災地復興へ貢献しようとする機運が高まっています。そこで復興過程にある釜石市におけるダークツーリズムの現状および被災地貢献、倫理的消費に対する意識調査を行うことにより、ダークツーリズムが来訪者の消費者意識にどのような影響を与えているか検討しました。

釜石市への来訪者に①回答者属性と旅行特性、②日常生活意識、③社会貢献活動、④旅行評価等に関するアンケート調査を実施し、項目毎に単純集計するとともに、ア.旅行評価と被災地貢献への意識変化、イ.生活意識と被災地貢献への意識変化、ウ.旅行評価と寄付つき商品に含まれる寄付額の3項目においてクロス集計を行いました。

釜石への旅行評価については、7割近くの来訪者がダークツーリズムとして釜石市を訪れることを勧めていました。また、被災地貢献、倫理的消費への意識について、ボランティア活動、寄付つき商品の購入、被災地で生産加工された商品の購入はやや増加傾向が認められましたが、被災地に対する募金や寄付、被災地を支援する物資の送付については減少傾向を示していました。

旅行評価と被災地貢献への意識変化の関係については、被災地でのボランティア活動への参加、被災地への寄付が含まれる商品の購入、被災地での生産加工された商品の購入、環境に配慮した商品の購入の項目では統計的に有意差がありました。生活意識と被災地貢献への意識変化の関係については、全ての生活意識において、被災地に対する募金や寄付の項目で統計的に有意差がありました。旅行評価と寄付つき商品に含まれる寄付額の関係については、復興進捗度、訪問満足度、再訪意向の項目において統計的に有意差がありました。

以上のように、釜石市のように相対的に震災遺構の少ない被災地での観光であっても、旅行評価の高さは訪問後の被災地で生産加工された商品や寄付つき商品の購入に対して正の影響を与えることがわかりました。



●三陸復興・地域創生推進機構組織図



宮古・大船渡 エクステンションセンターだより

宮古・大船渡エクステンションセンター
特任専門職員 梅谷 庄二



平成30年8月に宮古・大船渡エクステンションセンターに着任しました。今回、機構レター初投稿なので改めて宮古・大船渡エクステンションセンターを紹介します。

主な活動内容は、宮古・大船渡の各エクステンションセンターを拠点に自治体各部門と密に連携しながら地域の支援ニーズを調査するとともに、被災地に対して岩手大学研究シーズの情報提供やマッチングなどを行っています。

大学との共同研究、技術相談、大学設置の装置利用及び、分析・試験の依頼など個人、団体等を問わず無料でご相談に応じます。どんな小さな事でも構いません。どうぞお気軽にご連絡ください。尚、出来る限り現場で話を伺うよう心掛けていますが、外出が多くなっておりますので、来所を希望される方は事前に連絡をお願いします。

連絡先／岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 釜石サテライト
〒026-0001 岩手県釜石市平田第3地割75-1
TEL : 090-2886-8887 FAX : 0193-36-1610
E-mail: umeya@iwate-u.ac.jp

<宮古・大船渡エクステンションセンターのご案内>

【宮古エクステンションセンター】
〒027-8501 岩手県宮古市宮町1丁目1番30号 宮古市産業支援センター内
※平成30年10月に「イーストピアみやこ」市役所本庁舎に移転しました。
【大船渡エクステンションセンター】
〒022-8501 岩手県大船渡市盛町字宇津野沢15 大船渡市商工港湾部内

<宮古・大船渡のイベント紹介>

宮古市: 浄土ヶ浜まつり

宮古の代表的な景勝地である浄土ヶ浜で行われる祭りです。
開催地: 宮古市浄土ヶ浜園地内など
期 間: 4月下旬～5月上旬



大船渡市: 碁石海岸観光まつり

毎年、県外からの多くのお客さまにも楽しんで頂いています。
郷土芸能など地域に根づく特色ある文化や市民の活力も強く発信しています。
開催地: 碁石海岸レストハウス前大型駐車場など
期 間: 5月4日(土)～5月5日(日)



岩手大学三陸復興・地域創生推進機構レター

いわての“大地”と “ひと”と共に



国立大学法人 岩手大学
地域連携推進部
地域創生推進課

〒020-8551
岩手県盛岡市上田四丁目 3-5
TEL.019-621-6629
FAX.019-621-6656
E-mail. sanriku@iwate-u.ac.jp
2019年3月22日発行

<http://www.iwate-u.ac.jp/koho/newsletter.shtml> <岩手大学ホームページからもご覧いただけます。>

宮澤賢治センター これまでの活動

●定例研究会の開催

平成30年度の定例研究会は、第99回(5月25日)参加者31名、第100回(7月20日)参加者31名、第101回(9月18日)参加者44名、第102回(11月22日)参加者39名、第103回(2019年1月30日)参加者160名、第104回(3月20日予定)に開催した。なお、本件に係りJSPS 科研費 JP18K00495「宮澤賢治文学の国際的な普遍性と受容可能性に関する包括的研究」が採択されています。



第103回定例研究会の様子

●宮澤賢治生誕120周年記念、 高等農林学校卒業100周年行事

平成28年度は賢治生誕120周年、平成29年度は賢治卒業100周年にあたり、賢治センターでも記念行事として岩手大学地域創生フォーラムを2回開催いたしました。1回目は東京の日比谷図書文化館を会場に「賢治と語り合う21世紀の地域創生～イーハトーブ(岩手大学)からのメッセージ～」(2016年12月10日・大学出版部協会と共催)、2回目は本学復興記念銀河ホールを会場に「賢治と語り合う21世紀の地域創生～盛岡フォーラム～」を、ともに岡村民夫氏(法政大学教授)・石井正己氏(東京学芸大学教授)をゲスト講師に迎えて、岩手の復興と賢治文学の現代的意義について語り合いました。また、平成29年度には賢治の高等農林学校卒業120周年を記念して、岩手大学地域創生フォーラム「イーハトーブの学び舎から」(2018年3月24日)を、賢治ゆか



卒業100周年鼎談の様子

りの農学部附属農業教育資料館を会場に、同資料館及び宮澤賢治学会イーハトーブセンターと共催で開催いたしました。北水会(農学部同窓会)会長の鈴木幸一氏による賢治の後輩たちへの影響についての講演、秋山雅子氏と水本淳一氏による賢治作品の朗読と音楽演奏に加えて、佐藤通雅氏(歌人)・城戸朱理氏(詩人)・照井翠氏(俳人)による鼎談「賢治詩歌のこころを語る:岩手出身の詩人・歌人・俳人の立場から」という充実した内容でした。

●『賢治学』第6輯について

『賢治学』第5輯は「賢治学の現代的展開」を特集に2018年7月に東海大学出版部より刊行されました。第6輯は、「宮澤賢治得業論文100年」を特集として、新たに社陵高速印刷出版部から2019年6月刊行を目指して、現在、編集が行われています。特集の中身は、賢治の得業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対する価値」のカラー写真版を巻頭に、伊藤菊一氏(本学農学部附属農業教育資料館長)による力作「宮澤賢治の得業論文を読む」、高等農林学校卒業100周年記念フォーラムの際の佐藤氏・城戸氏・照井氏による鼎談「賢治詩歌のこころを語る」から構成されています。その他、コラム「それぞれの賢治」、研究例会報告、フォーラム「賢治学」という内容で、外国人研究者による研究報告も2報掲載される予定です。

●岩手大学人文社会科学部 宮沢賢治いわて学センターの設置について

平成31年4月1日より、岩手大学人文社会科学部の附属センターとして「岩手大学人文社会科学部宮沢賢治いわて学センター」が設置され、現在の「宮澤賢治センター」の活動等は、新センターに引き継がれます。

新センターの目的は、岩手における人文科学・社会科学の研究拠点として、岩手や宮沢賢治に関する研究や資料の収集などを、人文社会科学部を中心に積極的に推進し、その成果を公表及び地域社会に還元するとともに、グローバルかつローカルな視点をもった人材の育成を行うことにより、地域の文化や社会の発展に寄与することとなります。

事務取扱につきましても、これまでの地域連携・COC推進課から人文社会科学部事務室に移管されます。

宮沢賢治いわて学センター

〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-34
E-mail: kenji@iwate-u.ac.jp

date
12.1

岩手大学 管弦楽団 第58回定期演奏会 釜石公演



管弦楽団の
今後の活動
予定などは
こちらを▶
ご覧ください

管弦楽団 HP

twitter
@gandai_oke

釜石市民ホール TETTO ホール A にて、本学管弦楽団による演奏会を開催しました。

初めに岩淵明学長から、本演奏会の開催経緯や管弦楽団の演奏が客席の皆さまの心の癒しになればとの挨拶がありました。続いて、野田武則釜石市長から、沿岸部では初めて行う管弦楽団の定期演奏会ということで謝辞をいただきました。

久志本涼氏の指揮で、R. ワーグナーの楽劇「ニュールンベルクのマイスタージンガー」より第一幕の前奏曲、A. ポンキエリリの歌劇「ラ・ジョコンダ」より「ジョコンダのテーマ」と「時の踊り」、J. オッフェンバックの「天国と地獄」序曲、J. ブラームスの交響曲第2番二長調作品73が演奏されました。途中、ハープ奏者の森真由美氏がゲストとして演奏に加わり、オーケストラの迫力あるサウンドが会場に響き渡りました。アンコールでは、「G線上のアリア」など3曲が披露され、大きな拍手の中、終演しました。



久志本 涼氏 (中央)



講演会の様子

当日は、約200名の市民の皆さまにお集まりいただき、遠くは宮城県からもご来場いただきました。来場者からは「大変良い演奏会で楽しかった」、「また演奏会を行って欲しい」という声が多数寄せられ、会場が一体となって、ともに音楽を楽しむ素晴らしい時間となりました。

団長のコメント

岩手大学管弦楽団
平成30年度 団長
星 睦



岩手大学管弦楽団は岩オケ(ガンオケ)と呼ばれ、今年で設立59年目を迎えます。当団は楽しく音楽がしたい、岩手大学・岩手県立大学・盛岡大学・専門学校などの学生で構成されていて、半数は楽器未経験者でオーケストラに一切関わったことのない学生です。週3回の練習の中で団員同士教えあい、年2回の演奏会の成功を目指します。

そんな中、岩手大学岩淵学長から「沿岸で演奏をしてみないか」と声をかけていただきました。昨年は、当団のOBOGオーケストラの初演や病院や商業施設などから演奏依頼がくるなど、演奏する機会を多く頂き、沿岸での演奏のチャンスも逃すまいと、今回の開催に至りました。演奏後には、良い演奏だったと声を掛けていただくこともあり、今回演奏してよかったと感じております。今後も積極的に様々な場所で演奏をし、皆様に「岩オケサウンド」を届けられたらと思います。団員も募集しておりますので、気になる方は是非ご連絡ください。



吹奏楽部の
今後の活動
予定などは
こちらを▶
ご覧ください

吹奏楽部 HP

twitter
@lu.WOdate
12.23

岩手大学吹奏楽部 ウィンターコンサート in 陸前高田

陸前高田市コミュニティホールのシンガポールホールにて、本学吹奏楽部によるコンサートを開催しました。

当日は、陸前高田市をはじめとする気仙地域から約140名の市民の皆さまにお集まりいただきました。初めに岩淵明学長から挨拶があり、本コンサートの開催経費の一部に2016年6月にこのホールでフリーライブを行ったスターダスト☆レビューとファンの皆さまからの寄附金があてられていることや皆さんと共に今日のコンサートを楽しみたいとの言葉がありました。続いて、金賢治陸前高田市教育委員会教育長から、陸前高田市では初めて開催する本学吹奏楽部のコンサートという事で謝辞をいただきました。

本学教育学部教授の牛渡克之氏の指揮で、第1部は川辺公一の「高度な技術の指標」、高晶師の「吹奏楽のためのワルツ」など4曲が披露され、ジョージ・ガーシュウィンの「ラプソディ・イン・ブルー」では、本学教育学部特准准教授でピアニストの佐藤彦大氏がゲストとして演奏に加わり、繊細かつ迫力のあるピアノと吹奏楽の演奏が会場に響き渡り、演奏後は拍手が鳴りやみませんでした。その拍手に応え、佐藤氏は「ポロネーズ第



講演会の様子



佐藤 彦大氏 (右奥)

6番変イ長調(フレデリック・ショパン作曲)」も演奏してくれました。休憩時間にはトロンボーン4重奏、木管5重奏によるロビーコンサートも行われました。

第2部はポップスステージと題し、「Welcome(真島俊夫作曲)」、「すべてをあなたに(マイケル・マッサー作曲)」など5曲が演奏されました。「ど演歌えきすづれず(杉浦邦弘編曲)」では部員3名がこぶしのきいた歌も披露しました。アンコールでは、東日本大震災からの復興チャリティーソング「花は咲く」など2曲が演奏され、客席では目頭を押さえる姿も見えました。

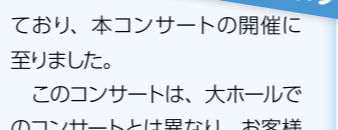
部長のコメント

岩手大学吹奏楽部
平成30年度部長
菊池 光熙



岩手大学吹奏楽部は現在1~4年生までで80人を超える大きなサークルで、2019年に創部67年を迎えます。一年間の集大成である定期演奏会を主軸に、吹奏楽コンクールや数々の演奏会に精力的に取り組んでいます。

今回の陸前高田市での演奏会の依頼を大学よりいただいた際、吹奏楽部内では盛岡市外でも演奏がしたいという意見が強くなっ



吹奏楽部の
今後の活動
予定などは
こちらを▶
ご覧ください

吹奏楽部 HP

twitter
@lu.WO

岩手大学 地域連携フォーラム 2018

date
10.29

In 盛岡

盛岡市は、岩手大学との間で、盛岡市・岩手大学連携推進協議会を組織しており、この協議会の事業として、「岩手大学地域連携フォーラム in 盛岡」を平成20年度から開催しています。フォーラム in 盛岡の特徴は、対象とする業種を変えながら、毎年開催していることです。

今回は、「AI×IoT時代の産業振興を推進する産学官連携」と題して、教育学部北桐ホールを会場に開催し、企業、大学・研究機関及び行政機関等から106名が参加しました。

このフォーラムでは、はじめに盛岡市派遣

金澤共同研究員
(盛岡市派遣)

理工学部 金澤教授

date
12.16

In 釜石

釜石市民ホール TETTO にて、「岩手大学地域連携フォーラム in 釜石」を行い、当日は140名以上の市民の方々や、高校生・大学生・企業・行政関係者にご参加いただきました。第1部では、菅原悦子理事・副学長からの「釜石キャンパスの概要説明」に続き、釜石キャンパス駐在の農学部後藤友明准教授「水産システム学コースの説明」、キャンパスで学ぶ大場由紀さん(大学院生)「釜石での研究と学生生活」、釜石高等学校 辰巳教諭「SSHの概要説明」、高校生の研究グループ(2グループ)「甲子柿由来のタンニン濃度」・「釜石の活性化のために～釜石の人口減少率を抑えよう～」と題した発表が行われました。

第2部では、農学部下飯仁教授「釜石はまゆり酵母の高機能化～更なる利活用のための育種～」、農学部三浦靖教授「科学的

菅原理事・副学長
(三陸復興・地域創生機構長)

の金澤健介共同研究員が、「市職員による産学官連携活動—交流・連携拠点としてのコラボMIU—」と題して、地域材の利活用に係る連携を事例として挙げながら、日頃の活動報告を行いました。

次に基調講演として、理工学部システム創成工学科知能・メディア情報コース教員であり、(株)エイシング創業者兼取締役 CTO でもある金天海准教授が、「ロボット・AI研究の実用化を通じた産学官連携」と題して、発表しました。

その後、次の発表者が AI・IoT 及び産学官連携に係る研究・事例紹介を行いました。

- ① (株) イーアールアイ技術部 三浦淳プロジェクトマネージャ
 - ② アルプス電気 (株) (現アルプスアルパイン (株)) 技術本部M8技術部 寺尾博年部長
 - ③ 岩手県農林水産部農業普及技術課 菊池政洋総括課長
 - ④ 三陸復興・地域創生推進機構地域創生部門 今井潤教授
- このフォーラムを通じて、産学官それぞれの先進的な取組みと、新たな連携のきっかけを、参加者に提供しました。

根拠に基づいた加工食品の開発～甲子柿粉体、柿の葉寿司など～、人文社会科学部 田中隆充教授「デザイン力で釜石は一番になれる!～“水産品・子業製品・スマホのアプリ等”のデザイン事例を通して～」、三陸復興・地域創生推進機構貫洞義一特任専門職員(産学官連携コーディネーター)「岩手大学の産学官連携の取組とシーズ紹介」と多種多様な成果報告が行われました。

本フォーラムでは、これら岩手大学とかわりのある釜石市内の研究事例を、具体的なケースを提示しながら分かりやすく市民の皆様にお伝えすることができました。また、水産システム学コースの学生が平成30年10月より釜石に住み、釜石キャンパスで学んでいることを伝えたことや、高校生や大学生の発表もあったことで、若い世代と行政・岩手大学・企業が交流することができ、地域全体として「地域創生」「産学官連携」「地域連携」活動が行われていることを意識するきっかけにもなりました。



パネル展示の様子

date
1.26

In 久慈

岩手大学と久慈市は、平成17年度に相互友好協力協定を締結し、平成18年度からは久慈市役所職員が岩手大学に共同研究員として常駐派遣されております。共同研究員は現在、三陸復興・地域創生推進機構地域創生部門に所属し、産学官連携による地域活性化に取り組んでいます。

「岩手大学地域連携フォーラム in 久慈」は、久慈グランドホテルを会場に、地域と大学の連携機会の創出による地域志向研究を促進することを趣旨として開催されました。

第1部では、地域創生部門長の今井潤教授から「岩手大学における地域創生への取組」について紹介するとともに、久慈エクステンションセンター川尻博特任専門職員と大内田泰之共同研究員(久慈市派遣)が活動報告を行いました。また、貫洞義一産学官連携コーディネーターが岩手大学の技術支援や研究シーズについて紹介しました。

第2部では、産学連携の取組として、理工学部清水友治准教授

今井教授
(地域創生部門長)

と久慈琥珀(株)の連携により開発された久慈琥珀粉末の成形技術について事例発表を行ったほか、久慈市の地域資源や課題をテーマとした取り組みとして、農学部食肉科学研究室4年の金谷圭太さんから短角牛の研究について、理工学部三上昌也特任准教授、理工学部ものづくりEF学内カンパニーMGP、八戸工業高等専門学校専攻科の学生から enPiT2 (成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成) を通じた PBL の取組について、大学院地域創生専攻修士2年の森田詩緒里さんから久慈港の認知度向上に向けた市民へのアプローチ手法の検討について、それぞれ事例発表を行いました。

参加企業からは「産学官連携は企業活動にとって極めて重要であり、また久慈で活動したいという人のためにも、久慈市と岩手大学との連携を継続すべきである」との意見が寄せられました。

最後に、岩淵学長は「岩手大学と久慈市の連携により、研究活動等で地域に関わる教員や学生の増加につながっている」とことについて言及し、参加した高校生に対し「次回のフォーラム開催時には、高校生の取組についても発表してもらおう場を設け、議論を深めたい」とメッセージを送りました。

農学部4年
金谷圭太さん